傾城水滸傳

壹

へ13
3087
7

へ13
3087
7
特

傾城水滸傳 第三編之一

仙鶴堂嗣梓

曲亭馬琴著

歌川國安画

扨亦後者とは人の虎尾の桜戸が雪より雪の踏まるゝ山の名草
抑這個月の翳も青山嵐の青柳が峯より峰ゆこけ登るそゝろ山の虚栗
拯得る山を抜く力の粉蝶が袖より袖へ舞ふ花の野宿の乞児娘
謀獲る底深き智海の呉竹が船より船へ漕ぐ水の網引の女兄姉

近江州伊香郡の一座の山あり俗ゆとまを志津岳と唱ふ此山琵琶湖を面にして余吾湖を背ふしてうしろ只これのみ狭くまわり山前山後相遶りてその末越前なる板ゝるの方へ出ることの山嶋峰ゝ連だるその景勢唐山なる梁山泊に似たり弥ゝ今この冊子の作設て彼と擬ふ。

近世寒巣斎綾足が本朝水滸傳を著して近江の某の山をもて梁山泊とせり。

塩焼王の故事に合せて渠竹生嶋長命寺の嶋々をもてせざるべからず皆神仏の霊地なれども梁山八百里のいと廣きに似ざれども其地貞の強人を懇て烈女の貞操を易へ赤勅懲の一端ゆく那時鎌倉の政子の京師の亀菊が女主内奏して支配終に義久の乱を生じたりしかの時の婦人の恰好義婦烈女の薄命なるを水滸の書に摸擬もるのみ婦人の恰好義婦烈女の薄命なるを水滸の書に摸擬もるのみ

文政十丁亥年春正月吉日新版曲亭馬琴識

馬琴

青山風の青柳
名取川月とうるる
涙もあるを共
かぐらくるる伊
このこちきん
向不看の
索城

ヨヌカの粉蝶
天地とちる智慧
海を渡る
歳技く
ちろはの
智計海の
呉竹

賽博士巨綸
天津雁真弓
健婦ら
占ー寨から
梁山泊の
苟且あつま路
女仁王
杣木

直蜚の猶妻
いちく川
澄むを獨る
後孫の
蕩てあくこの
泡よりそい拾
赤頭の
味鬼

指神子箸

山駕

日待仙絵や

乗れば虚空へ

うくる雲助

暴磯神の朱西

文政十亥丁年春　鶴屋喜右衛門版

御免江戸暦開板所

新刻　日本名所之繪　唐紙摺一枚　蕙齋鍬形絵眞筆

新板　女古状揃園生竹　半紙本　西品　出来　高川鵬山編撰

三國一夜談　全五冊　西入讀本　山東馬琴作

即考百箴　全一冊　劉子曾著　鐵猿翁

隨筆　玄同放言　初編二編共二冊　第三編三冊　刻

けいせい水滸傳

三編

前

馬琴作

國安画

仙鶴堂刻

還魂紙料 古画入二冊出来 柳亭種彦隨筆

繪童藝筆 遊言画手本 一名 鳥羽繪早まなび業

廣益 **懐中早割大全** 小本 一冊

塵劫記

新形深彩目 櫛花手引草 前編出来 為一筆斎編輯

芝居役者 **似顔早稽古** 後編 全一冊 五渡亭國貞画

文舎自笑評

三筆一津

役者評判記 三編 品定

懐寶 花乃都路 全

馬琴著　文政丁亥刷刻
全稿八巻合本

傾城水滸傳　第三篇之貳

國安画

本町筋通油町
鶴屋喜右衛門

桜
竹

弓
柳
糸
柳
桜
山

牛
柳

四
時
柳
柳
柳
柳
時
柳
柳
柳
柳

杣

野

特
信
丑
宗
杉
寅
左の上の
女郎男

傾城水滸傳三編 馬琴作 八冊 哥川國安画

道外武者太平樂 二冊 英笑作 哥川國安画

有喜世語草 同 一冊 哥川国安画

弓削道鏡譚 一級合一九作 六冊 哥川国安画

継子立波の濡衣 戀川春町作 三冊 同画

鎌倉山黄金千代鶴 市川升作 六冊 哥川国安画

金々鄭夢之世話 同 三冊 哥川国安画

美艶仙女香 平絹世話 南仙笑楚満人作 哥川国安画

錦絵摺團扇地紙問屋 通油町 鶴屋喜右衛門板

戯場小録長辟譚 六川 哥川国安画

義經奥州軍扇 五柳亭徳升作 五冊 哥川国安画

嗚呼忠臣夜光珠 竹田出雲作 五冊 哥川国安画

四天王其源 同 五冊 哥川国安画

忠臣藏外傳伊呂波寺節用 柳亭種彦作 五冊 哥川国安画

菅原實傳記 同 五冊 哥川国安画

伊達模様鄭寛潤 同 五冊 哥川国安画

馬琴作

國安画

三美筆畊 千形仲道
三美筆畊 谷金川